

はちの巣

小川未明

青空文庫

ある日、光子さんは庭に出て上をあおぐと、青々とした梅の

木の枝に二匹のはちが巣をつくっていました。

「おとなりの勇ちゃんが見つけたら、きつと取ってしまうから、私、知らさないでおくわ。」

そう思っおもて見てみいますと、一匹ひきづつかわるがわるどこかへとんでいっては、なにか材ざいりよう料りょうをくわえてきました。そして、一匹ひきがかえつてくると、いままで巣すにとまつて番ばんをしていたのがこんどとんでいくというふうに、二匹ひきは力ちからをあわせてその巣すを大おおきくしようとしていたのです。

そののち、光子さんは毎日梅の木の下に立たって、その巣すの大おお

きくなるのを見るのがなんとなくなつたのしみでありました。

「もう、今日はあんなに大きくなつた。」

しかし、それはほんとうにすこしずつしか大きくならなかつたのです。二匹のはちが小さな口にくわえてきた材料を、自分の口から出るつばでかためていくのでありましたから、なかなかたいへんなことです。けれど、はちは、たゆまずうまずに、朝も晩も巣をつくることに、いっしょうけんめいでありました。

ところが、どうしたにか、そのうち巣にとまっているのがいつも一匹であつて、もう一匹のすがたが見えなくなつたことです。「どうしたんでしょう？」と、光子さんはしんぱいになりました。光子さんはお母さんのところへ走つていきました。

「ねえ、お母さん^{かあ}、はちが一匹^{ひき}いないのよ。いつも二匹^{ひき}のがどうしたんでしょね？」といって、きいたのであります。

「そうね、きつとそのうちにかえってくるでしょう。」と、お母さんにもすぐにはわからなかったのでした。

「もう、ずつとかえってこないの。一匹^{ひき}がさびしそうにしているの。」と光子^{みつこ}さんは、なんだかひとりのこされたはちの身^みの上^{うえ}を思^{おも}うと、氣^きが氣^きでなかったのです。

「どうしたんでしょね。いたずらつ子^こにでも殺^{ころ}されたか、悪い^{わる}くもの巣^すにでもかかつて、かえれないのかもしれないかもしれません。」と、お母さん^{かあ}はおつしやいました。

——悪い^{わる}くも——ということが、すぐに光子^{みつこ}さんの頭^{あたま}に強^{つよ}くひ

びいてきました。いつであつたか、ひさしから木の枝^{き えだ}にかけていたくもの巣^すに、はちがかかつて、とうとうくものために殺^{ころ}されたのを見^みたことがあつたからです。また、その巣^すには、せみもあれば、ちようもかかつてたのでした。さいしよ、これらの虫^{むし}がとんできて、目^めに見^みえない細^ほい糸^{いと}に足^{あし}をとらえられると、逃^にげようとしてもがきます。しかし、いくらあせつても、もちのように糸^{いと}がねばりついて、足^{あし}にからみつくばかりです。そのうちに、虫^{むし}は弱^{よわ}ってしまふ、そのとき、どこからか黒^{くろ}い大^{おお}きなくもがあらわれてきて、するどい口^{くち}で生^いき血^ちを吸^すつてしまふのでありました。

そのありさまを思^{おも}いだすと、この勤^{きん}勉^{べん}なはちもそんなめにあつたのではないかと、いたましいすがたが想^{そう}像^{ぞう}されたのです。

そればかりではありません。また——いたずらつ子に殺される——
—というしんぱいも、ないではなかったのです。

いつか、勇^{いさむ}ちゃん^{みず}が水^{みず}たまりへ水^{みず}を飲^のみ^{みず}に^{みず}おりてきたはちを、
持^もつていた棒^{ぼう}でたたきおとして殺^{ころ}したことがあつたのです。

いずれにしても、一匹^{びき}のはちはなにかの不幸^{ふこう}に出^であつて、もう
かえつてこないもののように思^{おも}われました。光子^{みつこ}さんは、また、
梅^{うめ}の木^きの下^{した}にもどつてきました。

「まだかえつてこないのか。どうしたんでしよう、ひとりで、さ
びしくない？」といつて、巢^すにとまつている一匹^{びき}のはち^{はな}に話^{はな}しか
けました。

けれど、ものをいうことのできぬはちは、ただ巢^すにとまつてじ

つとしてゐるばかりでありました。ちようどそこへ、^{いさむ}勇ちやんが遊びにきましたから、^{みつこ}光子さんは梅の木の^{うめ}下をはなれてしまいました。

「^{みつこ}光子さん、まだ梅の^{うめ}実がなっているね。もう梅の^{うめ}実はあまくなつた？」といつて、^{いさむ}勇ちやんは梅の^{うめ}木を見あげました。

^{みつこ}光子さんは、^{いさむ}勇ちやんがはちの^す巣を見つけたらたいへんだ、きつとそのままにしておかないと思ひましたから、

「^{いさむ}勇ちやん、こつちへいらつしやい。きれいな^{いんぎよう}お人形^{さん}さんを^き見せてあげるわ。昨日^{きのう}、よそのおばさんに^ひいただいたのよ。」と^{いさむ}いいますと、^{いさむ}勇ちやんは日^ひにやけたまっ黒な^{くろ}顔^{かお}をして、

「^{いんぎよう}お人形^{さん}さんなんか、いいよ。それより、ねこをつれておい

でよ。」と、いいました。

いさむ
勇ちゃんは、ねこが大^{だい}すきなのでした。

「タマは、いまいないの。」と、光子^{みつこ}さんはタマを出^だすまいとしました。

なぜなら、勇^{いさむ}ちゃんはあまりかわいがりすぎて、ねこを苦^{くる}しめたからです。

「どこへいったの？」

いさむ

勇^{いさむ}ちゃんは、お家^{うち}の内^{なか}をのぞいていました。光子^{みつこ}さんは、タマ

が^で出てこなければいいと思^{おも}いました。出^でてきたら、また勇^{いさむ}ちゃん

が^でだいたり尾^おをひっぱったり、いやだとい^でって逃^にげるのをむりに

おさえて、外^{そと}へつれてい^でってしまうだろうとしんぱいになったか

からです。

「きつと、おじいさんのところでしよう。」と、光子^{みつこ}さんはいいました。

勇^{いさむ}ちゃんは、光子^{みつこ}さんの家^{うち}でいちばんおじいさんがこわかったのです。だから、もうそれつきりねこのことをいうのをやめてしまいました。

「光子^{みつこ}さん、遊^{あそ}びにいこう。」と、勇^{いさむ}ちゃんがいいました。

「ええ、いきましよう。」

光子^{みつこ}さんは勇^{いさむ}ちゃんと肩^{かた}をならべて、木戸^{きど}をあけて、きらきると日^ひが草木^{くさき}の葉^はにかがやいている往^{おう}来^{らい}の方^{ほう}へと出^でていきました。あちらには、年^{とし}ちゃんやよし子^こさんたちが遊^{あそ}んでいました。すぐ

に、みんなはいっしょになりました。

「原^{はら}つばへポチをつれて、きちきちばったを捕^とりにいこう。」と、勇^{いさむ}ちゃんがいいました。

ポチはみんなのすがたを見^みると、とんできました。そして、いきなり勇^{いさむ}ちゃんにとびついて勇^{いさむ}ちゃんの顔^{かお}をなめたりしました。

原^{はら}つばへいくと、ほかにも子供^{こども}たちがいて、きちきちばったを追^おっていました。また、ほかの女^{おんな}の子は、じゆず玉^{だま}を取^とってくびかざりなどをつくっていました。

「私^{わたし}、じゆず玉^{だま}がほしいの。勇^{いさむ}ちゃんにとってくれない？」と、光^み子^{つこ}さんが勇^{いさむ}ちゃんのいるところへきて、いいました。

勇^{いさむ}ちゃんはきちきちばったを捕^とらえて、指^{ゆび}のあいだにはさんで

いました。

「光子さん、じゅず玉^{だま}がほしいの？　たくさん取^とってあげるから、こんどタマをいじらせてくれる？」と、ききました。

光子^{みつこ}さんは、勇^{いさむ}ちやんがねをいじるのはしつこくてかわいそうだけれど、いじめるのではないから、「うん。」といって、承^{しょう}諾^{だく}しました。

「じゃ、このきちきち持^もっていておくれ。」といって、ばったを光子^{みつこ}さんにわたして、自分^{じぶん}は草^{くさ}むらの中^{なか}にはいりました。

ポチが、まっ先^{さき}になつてとびこみました。

光子^{みつこ}さんは、こちらにぼんやりと立^たって、勇^{いさむ}ちやんがじゅず玉^{だま}の莖^{くき}を折^おってくるのを待^まっていました。年^{とし}ちやんやよし子^こさんは、

あちらでまりぶつけをしていました。青い海のような空には、白い雲がほかけ船の走るように動いていました。

このときです。

「あいた！」と、ふいに勇ちゃんのさけぶ声がしました。

「どうしたの？」と、光子さんは顔をかえて、自分も草むらの中にかけようと思いました。勇ちゃんは片手にじゅず玉の茎にぎり、片手でほをおさえて泣かんばかりにして出てきました。

「はちにさされた！」といって、目からなみだを出しました。

「はちに？」

光子さんは、わかったと思いました。

「勇ちゃん、かんにんしてね。」といって、光子さんはわびまし

た。

自分がじゆず玉を取つてくれとたのまなければ、勇ちゃんは、はちになんかさされなくてもすんだのだと思つたからです。勇ちゃんは、じゆず玉のなっている枝を光子さんにわたすと、きちきちばつたをうけ取つて、

「お母さんに、お薬をつけてもらうから。」といつて、走つてお家へかえつてしまいました。

光子さんは、きゆうにつまらなくなつて、じゆず玉の枝をひきずるようになしてお家へかえりました。じゆず玉の実は、銀色に、むらさき色に、さながら宝石のように光っていました。

お家へかえつてから、梅の木のはちを見ると、ひとりぽっちで

巢をつくっていたはちとおなじなはちが勇ちやんをさしたのだとおも
 思うと、きゆうに、はちにたいする同情がうすくなつたけれど、また、そのしおらしいすがたを見ると、
 「お家のはちは、かわいそうなのよ。」と、ひとり言をして、光子
 さんはそのはちを見まもっていました。
 「これは、きつと、お母さんばちにちがないわ。」と思うと、
 光子さんの目の中からしぜんにあついなみだがこぼれおちたので
 す。

二、三日たつて、勇ちやんは木戸口から、「光子さん！」とい
 つて、遊びにきました。

まだ、ほおがいくらかはれていました。そのうちに、勇ちやん

は梅^{うめ}の木^きのはちの巣^すを見^みつけました。

「あ、はちが巣^すをかけているよ。」といって、勇^{いさむ}ちゃんは梅^{うめ}の木^きを見^みあげながら小^{ちい}さな太^{ふと}い指^{ゆび}でさしました。

光子^{みつこ}さんは、胸^{むね}がどきどきしました。「さあ、たいへんだ!」

と思^{おも}ったからです。このあいだの怒^{いか}りもあつて、勇^{いさむ}ちゃんはきつ

と、このはちの巣^すを取^とるにちがいないと思^{おも}いましたから、光子^{みつこ}さ

んがおどろいたのもむりはなかつたのです。はたして、勇^{いさむ}ちゃん

はあたりを見^みまわして、なにか棒^{ぼう}がないかとさがしていました。

「ねえ、勇^{いさむ}ちゃん、このはちは、ひとりぽちでかわいそうなの

よ。」と、光子^{みつこ}さんはあわれつぽい声^{こえ}で、いいました。

「ひとりぽちなの?」と、勇^{いさむ}ちゃんは、ふしぎそうにききかえ

しました。

「え、そうなの。二匹^{ひき}でいたのが、一匹^{ひき}いくら待^まつても、もうかえつてこないの。」と、光子^{みつこ}さんは答^{こた}えました。

「ほんとう、どうしたんだろうな。」と、勇^{いさむ}ちゃんは目^めをまるくしました。

「いたずらつ子^こに殺^{ころ}されたのか、わるいくもの巣^すにかかったんだらうって、お母^{かあ}さんがおつしやつてよ。」

勇^{いさむ}ちゃん^{おも}はなんと思^{おも}つたか、だまつて、たつた一匹^{ひき}巣^すに止^とまつているのを見^みていましたが、

「かわいそうにね。」といつて、きゆうに、はちをいたわるようにながめていました。

「まあ、よかった！　やはり勇いさむちゃんはやさしい。」と、光子みつこさんは心こころの中なかで思おもいました。

「勇いさむちゃん、あんまりタマをいじめちゃいやよ。」といつて、光み子つこさんは奥おくから子こねこをだいてきました。

勇いさむちゃんいさむは、にこにこして両りょう手てを出だしていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「はちの巣《す》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はちの巣

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>